

武蔵野日曜集会

わが水

――ヨハネ伝第4章1～26節――

1994年6月5日

小池辰雄

告白的表現 神・キリストとの関係が立っていること 砕けたる魂 霊の貧しき者 神の賜物
とは聖霊のこと 神交 私は信仰なんかない キリストの霊に在って拝せよ 一如の関係 圧
倒されている現実

【ヨハネ4:1～26】

1主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネより多しと
パリサイ人に聞こえたるを知り給いし時、²（その実イエス自らバプテスマを
施ししにあらず、その弟子たちなり）³ユダヤを去りて復またガリラヤに往き給う。
⁴サマリヤを経ざるを得ず。⁵サマリヤのスカルという町にいたり給えるが、
この町はヤコブその子ヨセフに与えし土地に近くして、⁶此処にヤコブの泉あ
り。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う、時は第六時頃なりき。⁷サマリ
ヤの或女、水を汲まんとて来りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と言
いたもう。⁸弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。⁹サマリヤの女い
う『なんじはユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むこと
を求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交まじりせぬ故なり。¹⁰イエス答
えて言い給う『なんじ若し神の賜物たまものを知り、また「我に飲ませよ」という者
の誰なるかを知らたらんには、之に求めしならん、然らば汝に活ける水を与
えしものを』¹¹女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井いどは深し、その活
ける水は何処より得しぞ。¹²汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブより
も大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』¹³イエ
ス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。¹⁴然れど我があ
たうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉と
なり、永遠の生命の水湧きいづべし』¹⁵女いう『主よ、わが渴くことなく、
又ここに汲みに来ぬために、その水を我にあたえよ』¹⁶イエス言い給う『ゆ
きて夫をここに呼びきたれ』¹⁷女こたえて言う『われに夫なし』イエス言い
給う『夫なしというは宜うなり、¹⁸夫は五人までありしが、今ある者は、なん
じの夫にあらず。無しと云えるは真なり』¹⁹女いう『主よ、我なんじを預言



者ととむ。20 我らの先祖たちは此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言う』21 イエス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拝する時きたるなり。22 汝らは知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。23 されど真の礼拝者の、霊と真とをもて父を拝する時きたらん、今すでに来れり。父は斯のごとく拝する者を求めたもう。24 神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり』25 女いう『我はキリストと称うるメシヤの来ることを知る、彼きたらば、諸般のことを我らに告げん』26 イエス言い給う『なんじと語る我はそれなり』

●告白的表現

私はいわゆる聖書の解釈というようなことをここでするわけではない。私は聖書を身体で読んで、その告白的表現をする。聖書について解釈するのではない。聖書に即して、自分の問題として、告白的な表現をする。これが私のこの集会の精神ですから、そのおつもりで聖書解釈なら、解釈の本はいくらでもありますから、そういうのをお読みになれば結構です。聖書自身が告白なんです。筆者が告白している。信仰を説明しているのではない。告白とは大事なことで、告白す、体験を語ることです。皆さんも、そういうつもりで、聖書を自分の告白と相通するものとしてお読みになるのが一番いい。それを日蓮の言葉でいうなら、「身読」、身体で読むということです。日蓮は

「法華経を身読せよ」

と弟子たちに言った。さすがは日蓮です。

ゲーテは、

「自分の書いたものは全部告白である」

と言った。さすがはゲーテです。ゲーテの文学がなぜ素晴らしいかというと、彼は体験からものを言っている。頭で書いたものはひとつもない。だから、ゲーテの文学は凄い。私は『ファウスト』を愛読しています。『ファウスト』は世界の最大文学の一つです。

●神・キリストとの関係が立っていること

それではヨハネ伝に入ります。

「主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネより多しとパリサイ人に聞こえたるを知り給いし時、

「ヨハネ」とは洗礼のヨハネのこと。「パリサイ人」というのは、モーセの律法を非常によく知っていて自分で実践しているということを誇っているご連中です。だから、パリサイ根性というのは、自己義認して高ぶって人を批判するような精神をいう。



2 (その実イエス自らバプテスマを施ししにあらず、その弟子たちなり)

キリストは地上にあるときにバプテスマを施さない。洗礼のヨハネは水に浸してバプテスマをしていた。キリストもそれに従って水の中に全身を浸して、洗礼のヨハネからバプテスマを受けた。事実、彼はそれをした。けれども、彼が水の中に入って、起き上がったら、

「御霊が鴿の如く天より降つてその上に止まった」

と書いてある。さすがはイエスです。聖霊が鴿の形で彼の上に降った。鴿は霊鳥だね。鴿は平和の象徴でもある。

本当の平和はそのもとに平安がなければダメです。平安ということが大事です。平安というのは、神さまやお釈迦さんとの関係が垂直に立つこと、そこに平安がある。人間の間の平和というのは、この平安がなければ本当の平和はこない。平安は縦の関係で、平和は横の関係です。人間の関係は横の関係だから、個人的な関係にしろ、社会的な関係にしろ、国際的な関係にしろ、仲良くやっていくのは平和ということです。そのためには、この縦の関係、神・キリストやお釈迦さんとの関係が立っていること、それが平安です。仏道でいうならばお釈迦さん、キリスト道でいえば神・キリストとの関係です。

関係が立つとはどういうことですか。関係が立つためには、福音の世界では、自分は平伏ひれふさなければダメです。自分はキリストの前に平伏す。そうすると、この平安の関係にあるけれども、それではまだ本当は足りない。平伏して、そしてキリストの中におどり込む、キリストの中に入る。キリストと一つになる。キリストの中に入ってキリストと一つになったときに、これが本当の平安です。

●砕けたる魂

だから、私は「信仰」という言葉は嫌いだ。

「私は信仰なんかありません」

と言う。私は「信仰」なんてものはまだるっこくて嫌いだ。私はこの平安の世界、キリストと一つにならなければ、私の現実はない。

「そうですか、先生はそんなに偉いのですか」

なんて、そうではない。偉くないから入る。ダメだから入っていく。ダメだから、キリストはダメな人間を無条件に入れる。無条件に入れてくださるのはキリストの他にない。人間というのはいつも条件をつける。

「でもまだよく勉強してないではないか、よく聖書を読んでないではないか」と、何か理屈をつけて人を批判する。キリストは無批判なんです、

「ああ、来なさい」

と仰る。ただし、入っていくのには、平伏さなければ入れない。高ぶった気持の者はサタンの弟子だから、



「お前はサタン（悪魔）の方へ行け。私の所に入ろうとするものは平伏しの魂でなければ入れない」

と言われてしまう。

「砕けたる魂」ということが詩篇51篇にある。そうすると、

「そうですか、私はなかなか魂が砕けませんで困ります」

なんて。それはそうだよ、誰だって。

「神のもともたもう祭物そなえものはくだけたる靈魂たましひなり。神よなんじは砕けたる悔いし

ところをかろしめたもうまじ。」（詩篇51・17）

と。何か供物をもつていくのではない。

「砕けたる魂そなえものが供物だ」

という。

「神よなんじは砕けたる悔いしところをかろしめたもうまじ」

と、そのとおりです。詩篇51篇は大事な詩篇です。

「ああ神よねがわくはなんじの仁慈ちひさしみによりて我をあわれみ、なんじの憐憫あわれみのお

おきによりてわがもろもろの愆とがをけしたまえ。わが不義をことごとくあら

さり我をわが罪よりきよめたまえ。」（詩篇51・1～2）

旧約ではこうやって祈るけれども、新約ではキリストが私たちの罪を全部引き受けてしま

つて、

「お前の罪は私が全部引き受けてしまったぞ」

ということ。す。「お前の罪」とは、私たちは自我があるということ。自我、自我心、自己肯定が「罪」なんだ。どんなに立派な人でも、自己肯定しているのは福音的に罪なんだ。キリストは完全に自己否定の人間です、己を何ものともしなかった。

● 霊の貧しき者

いわゆる山上の垂訓の第一言に、

「恵福さいわいなるかな、心の貧しき者」

とある。あの「心」という字は本当は「霊」という字です。

「恵福さいわいなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

ということ。す。「霊の貧しき者」とは自分、何ものともしない者ということ。神さまが愛をもつて支配しているところが「天国」です。キリストにとつては天国は神さまだから、キリストはいつも天国人てんこじんなんです。本当の天国人はキリストの他にいない。ということは、神一切にしているから。キリストは神一切で、自分はゼロにしている。そうすると、これが無限大になる。

「ゼロ＝無限大」（0＝∞）



とはイエス・キリストのことです。神という無限大がこのゼロの中に入ってくる。だから、彼の語る言葉は全部神の言葉で、彼の行為は全部神の行為である。それを「義人」という。

「義人なし、一人だになし」

とパウロが言った。「義」というのは正義ということではない。神さまとの縦の関係が完全に立っていることを義という。

「キリストの他に義人はいない、神さまとの関係がちゃんと立つ人はいない」

ということです。「愛と義」という言葉があるが、この義は対立している義ではない。

洗礼のヨハネは水のバプテスマをしたが、イエスは聖霊のバプテスマをなさる。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来^{きた}れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるる

までは思い^{せま}遍ること如何^{いかん}許^{ゆる}ぞや。」(ルカ12・49～50)

とある。

「我には受くべきバプテスマあり」

とは十字架のことです。

「そうしたら、お前たちに今度は聖霊のバプテスマをするぞ」

と。キリストは地上ではバプテスマしない。キリストのバプテスマは聖霊のバプテスマだから。聖霊を私たちに与えることが「水を注ぐ」ことです。今日の主題の『わが水』というキリストの水は聖霊、霊水のことです。聖霊というのは何ものにも代えられない。私から聖霊をとつたら、もぬけのからになってしまう。

●神の賜物とは聖霊のこと

³ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給う。⁴サマリヤを経^へざるを得ず。

エルサレムから北の方です。まん中にサマリヤがあるから、

⁵サマリヤのスカルという町にいたり給えるが、この町はヤコブその子ヨセフに与えし土地に近くして、⁶此処にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給う、時は第六時頃なりき。⁷サマリヤの或女、^{ある}水を汲まんとて来りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と言いたもう。

ちょうどお昼頃です。暑いからキリストも喉がかわいて、「飲ませてくれ」と言った。

⁸弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。⁹サマリヤの女いう『なんじはユダヤ人なるに、如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交^{まじ}りせぬ故なり。

ユダヤとサマリヤは仲が悪い。サマリヤというのはいろいろな人種が混ざっていて混合的なんです、余り純粹でない。ユダヤはユダヤ人だけです。それで仲が悪い。キリストはそんな区別なんかしませんから、混血であろうと何であろうと一向差し支えない。サマリヤ



のある女がすぐそういった区別をして、

「あなたはユダヤ人でサマリヤとは仲が悪いのに、なぜサマリヤの女の私に水をく
ださいなんて仰るのか」

と。ユダヤ人は血統を重んずる。

「アブラハムの子、イサクの子……」

なんてやって系統を重んずる。サマリヤはゴタゴタしている。だから、

「なぜそんなゴタゴタのサマリヤの女に水をくれなんて仰るのですか、もともとユ
ダヤと交わりをしないのではないですか」

というわけです。

10 イエス答えて言い給う『なんじ若し神の賜物たまものを知り、また「我に飲ませよ」
という者の誰なるかを知りたらんには、之に求めしならん、然らば汝に活け
る水を与えしものを』

「神の賜物」とは聖霊のことです。聖霊から発するところのいろいろな恵み、それを賜物と
パウロは言っているけれども、聖霊そのものをここではキリストは賜物と仰った。これは
単数です。聖霊からくる賜物は複数になる。

「お前がもし神の賜物が何であるかを知り、また「我に飲ませよ」というこの私が
誰であるかを知ったら、逆に私に求めたのに。そうしたら、活ける水をお前にや
るのに」

と、生き生きと会話が書いてある。ところが、この「賜物」をサマリヤの女は知りつこない。

11 女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井は深し、その活ける水は何処
より得しぞ。12 汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブよりも大いなるか、
彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり』13 イエス答えて言い給
う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。14 然れど我があたうる水を飲む
者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生
命の水湧きいづべし』

この14節のキリストの言葉は大事です。これは霊水、聖霊のことです。聖霊は水に例えら
れたり、火に例えられたりする。火の如しとか、水の如しとか。「水火相容れず」というが、
聖霊の世界は、水火相容れている。

● 神交

我々の神交の現実、信じ仰いで（信仰）いるような香気な世界ではない。神との交わ
りの世界です。神との交わりは、私たちはキリストとの交わりをまずしなければダメです。
だから、私は

「エン・クリスト」（キリストの中に）



と言う。キリストの中に入る。それが神交なんです。我々は神さまに直接交わることはできない。キリストが媒介です。キリストが我々の自我を完全に引き受けて、罪を贖ってくださった。罪を贖ってくださったから、私たちはキリストの中に平伏して入れるわけです。誰でも無条件に入れる。

「我はキリストと一つなり」

ということが言えるわけです。言えなかったら本当はダメなんです。偉くなったから一つになったわけではない。ダメだから入れる。ダメだから、キリストは入れてくださる。そうすると、それが本当の神交の世界です。信じ仰いでいるような呑気なものではない。そんな「信仰」は要らない。キリストの中に入る「神交」でなくては。

「信仰は要らない」

なんていう人はいないだろうね。普通は、

「信仰は大事です。あなた方はしっかり信仰をもちなさい」

なんて言っている。私みたいに単刀直入にグツと言うひとは恐らくいないね。それは本当の現実をもっていないから。説明しているような世界で、告白でないから。私の活かされている現実が聖霊の現実です。聖霊はいろいろな力をもっている。力も智慧も光も愛も生命も何でももっている。聖霊というのは大変な霊だ。

「聖霊」という言葉は非常に躓きになる。

「困ったな、聖なる霊だから」

なんて、みなそれで聖霊を敬遠してしまう。キリストが

「賜物を与える」

と言うのは、この聖霊のことです。

「私は賜物を与えるために来た。地上ではできない。私が受くべきバプテスマ、十字架に架かったら、お前たち祈って待つている。聖霊が降るから」

と。それでペンテコステでみなひっくり返った。キリストの弟子になったのは、あの聖霊を受けてからです。聖霊を受けなければ本当の弟子にならない。地上でいくらキリストと一緒にご飯を食べたってダメなんだ。

●私は「信仰」なんかない

もうこんな「信仰」は要らない。キリストが

「信仰薄きものよ」

なんて仰るから、

「では、信仰を厚くしなければいかん」

なんて思う。キリストの言葉に躓いたらダメですよ。私はキリストに、

「私は信仰なんかありません。あなたがあるだけです。自分の信仰なんかありません」



ん」

と言つてやる。福音の世界はみな語り伝える世界です。書かれたものは音がないから、書かれたものを読むより録音を聞いた方がいい。だから、集会には来なければダメだということ。書いたものを読むだけではダメだ。集会で気合がかかった話の、霊的な気合が通じないからね。

¹³ イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。¹⁴ 然れど

我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中に

て泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

この14節が大事です。さすがはイエス・キリストの言葉だ。こんな言葉はイエスでなければ言えない。「わが与うる水」とは聖霊のことです、霊水です。霊水を飲んだら、永遠に渴かない。逆に、泉となつて永遠の生命の水がその人から湧き出る。これは愉快的言葉だ。渴きを知らないという。何しろ、キリストと一つにならなければ、「聖霊の水」なんて言つたつて観念になってしまう。キリストと本当に一つにされたら、

「はい、聖霊の水が私の中から湧いていますよ」

とはつきり言えますから。

「聖霊の水とはどういうものだろうか？」

なんて考えたつてダメだ。キリストと一つになることが先ず根底ですから。「エン・クリスト」(キリストの中)です。キリストの中に入れば、あらゆることから始まる。

「私は信仰なんかない」

と言っている。「神交」、神との交わりということです。神との交わりは「エン・クリスト」、キリストの中に入れば、この神交が一つで、「私の信仰」を問題にしなくていい。よく

「あなたの信仰は？」

なんて言う。キリストが

「信仰うすきものよ」

と言うから、

「それでは私は信仰を厚くしなければいかん」

なんて思う。そんなことをしたら、くたびれてしまう。あのキリストの言葉に躓かなくていい。

「私は信仰なんかありません。私はあなたの中に入ります」

とはつきり言えればいい。エン・クリストです。そうしたら、この神交は自然にできてしまう。キリストの中に自分を投げ入れなければダメです。投身が大事なんです。「信仰」は、こんな観念的なものはいらない。冥想して祈つて、自分をキリストの中に投げ入れる。「祈り入る」とはそのことです。祈入するとはキリストの中に投身することです。キリストと一つになったら、何でも始まる。これは大事なことです。今のクリスチャンはそういう霊的な現実



をもたないからダメだ。

十字架が土台です、間違えてはいけませんよ。キリストの十字架で、

「われキリストと共に十字架せられたり。我もはや生くるにあらず。キリスト

わがうちに在りて生きたもうなり」

とパウロが言った。何ですか、「キリストわがうちに」とは。

「御霊のキリストが、キリストの聖霊がわが内で生きておられる」

ということですよ。あのガラテヤ書2章22節のパウロの告白が大事なんです。パウロというのは初めはキリストに反抗していたけれども、これがひっくり返ったら、最大の弟子となつた。あんな鮮やかな転向は他にない。

「わが目より鱗の如きもの落ちたり」

と。新約聖書のパウロはよく読まないよね。パウロをよく読んでないと、福音書が本当は読めない。

●キリストの霊に在って拝せよ

14 然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

「わが与うる水は彼の中にて泉となり」

と書いてあったら、「彼」を「汝」と読まなければダメです。彼という第三人称でなく、「汝よ」と二人称でものを言っている。聖書の読みかたというのは、いつも我と汝の関係において読まなければダメです、三人称では。

「私の与える水を飲むお前は、永遠に渴くことがない。私が与える水はお前の中で泉となつて、永遠の生命の水が湧きでるぞ」

ということですよ。

15 女いう『主よ、わが渴くことなく、又ここに汲みに来ぬために、その水を我にあたえよ』16 イエス言い給う『ゆきて夫をここに呼びきたれ』17 女こたえて言う『われに夫なし』イエス言い給う『夫なしというは宜なり、18 夫は五人までありしが、今ある者は、なんじの夫にあらず。無しと云えるは真なり』キリストはちゃんと見ている。

19 女いう『主よ、我なんじを預言者とみとむ。20 我らの先祖たちは此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言う』21 イエス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、

「我が言うことを受け取れ」ということです。

此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拝する時きたるなり。22 汝らは知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。



我らは預言者から伝わって、ちゃんと知っているものを、本当の神さまを拝していると。特に旧約の預言者、イザヤ書です。イザヤ書53章は大事なところですよ。

23 されど真の礼拝者の、^{まこと}霊と真とをもて父を拝する時きたらん、今すでに来れり。父は斯のごとく拝する者を求めたもう。24 神は^{まこと}霊なれば、拝する者も

霊と真とをもて拝すべきなり』

これは大事な言葉です。「真」というのは、ルターは「ヴァールハイト」と訳しているけれども、「アレーテイア」というギリシア語です。「霊」はもちろん聖霊のことです。「真理」という言葉は観念的な言葉だけれども、ギリシア語のアレーテイアという字はそんな観念的ではない。真理の实体はキリストなんです。

「キリストの霊に在って拝せよ」

ということが、この

「霊と真とをもて拝すべし」

の本当の意味です。キリストに在って（エン・キリスト）拝す。

「我に在って拝せよ」

ということ。我々が祈る時に最後に「み名に在って祈ります」と言う。

「み名の中で祈ります」

ということです。

「…に在って」

ということが大事なんです。有ではなく在です。

●一如の関係

25 女いう『我はキリストと称うるメシヤの来ることを知る、彼きたらば、^{もろもろ}諸般

のことを我らに告げん』26 イエス言い給う『なんじと語る我はそれなり』

「お前と語っている私だよ」

と、これが本当の訳です。「我はそれなり」とはちよつと二段構えの訳になっているけれども。

「エゴ・エイミ」「私だよ」

と書いてある。キリストを見ていて、この女は見えてない。

「あなたはちよつと普通の人と違いますね」

くらいは感じなければダメなんだ。ちよつとどころではない、大違いだ。

そして、27節から非常にいきいきと劇的に書いてある。聖書は現実を伝えているので、説明している本ではない。現実を語っている。聖書の説明や解釈はもう御免こうむる。それよりも、聖書をただ読んでいればいい。この14節はあなた方自身がキリストに、

「あなたがくださっている水を私は飲んでいきますから、永遠に渴くことがあります」
ん。私の中から泉のように永遠の水が湧いています」



と答えたらいい。聖書はいつも、一人称、二人称で読むですよ、三人称ではダメです。一人称、二人称に直して読んでいく。他人^{ひと}ごとではないんだから。一対一の関係です。しかも、これは本当の関係は一如の関係です。

「我が汝か、汝が我が」という、

「私はあなたの中にいるではないですか、あなたは私の中にいらつしやるではないですか」

という関係です。

●圧倒されている現実

「ありがたくてしようがありません、力が来てしようがありません、光が来てしようがありません」

という、圧倒されている現実です。キリストに圧倒されているから、私は疲れを知らない。眠くはなるよ、肉体的に。しかし、

「ああ、今日は疲れた。もう飽きた」

とか、そんなことはないんだ。

ナポレオンがセントヘレナに流されて、福音書を読んだ時に、

「福音書は本ではなかった、生き物であった」

と言った。さすがはナポレオンだ。彼は最後に本当にその世界に入って、天国に連れていかれたらうね。

どんな本を読むときにも、聖霊の光で読みなさいよ。そうすると、その本に書いてある以上のことをそこで読みやぶってしまう。眼光紙背に徹するというのはそのことなんです。ダンテの『神曲』やゲーテの『ファウスト』をそれで読んだら凄いことになる。そういう読み方は普通はできない。ユゴーの『レ・ミゼラブル』は素晴らしい小説だ。涙が出るよ。あのコゼットという少女は宝のような少女だな、ジャンバルジャンの気持を動かすようなひとだから。

若い人は東西の第一流の古典をよく読まないといかん。老子は凄い。これは宇宙的ですよ。

「道の道無きを道という」

とある。道の無いのが本当の道だぞと、一番先に書いてある。

「これが道だ」

といって道を限定したら、それだけののはなし。無限定の世界でなければダメなんです。無道の道、道無き道。日本人は本当は道の人なんです。よく歩くんだけ。自分の足でもって、道のない所を自分で道を造りながら歩いていく。それが本当の道なんだ。これが無道の道、あるいは無路の路という。



あなた方は晴れた夜に空を仰ぎますか、星を見ますか、宇宙の星の輝きを。鶏のように地面をあさっているようなことでは魂はダメです、空を仰いでいないと。とにかく、

「聖書は楽しくてしょうがない。他のどんな小説よりも楽しくてしょうがない」

ということにならなければウソだよ。本当に聖書を読んではないね、聖書を楽しく読まなければ。

「聖書は難しい」

なんて、ひとつも難しくない。こんなに楽しい本はない。光が来てしょうがない、力が来てしょうがない。私の聖書には全部線が引つ張つてある。読んではないところは無い。創世記から黙示録まで全部、線が引つ張つてある。この聖書が三回目かな。ある聖書は破つてポケットに入れて電車の中で読んだ。

私はまだ90歳だけれども、私はこれからもう歳を数えるのをやめた。

「いつまで生きるか」

ではない。永遠の生命だから。「いつまで」ではない。終りを知らない生命だから。

ヒルティは

「時間を気にするな」

と言って、時計を持たなかった。青年が読む本としては、ヒルティの書いたものは非常に大事な本だ。スイスの珍しい人です。とにかく、あなた方は第一流のものを相手にしてください。

